

源氏物語注

^ 12
2452

5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90

刊2
2452

明治四十二年四月八日
大田東佐 氏寄贈



陸文庫



はらりませ

すまじこと

浮世草子廣傳は出づり、是はかたがたあるより、言訓大きは遠なり、
嗜字好字なるといふことよむべし、此の字もまたよくすと書せら
るをみる

内の内りのつて、整沖云、儀軌、秘密の御の中、佛母菩薩と傳はれし書
る作法の儀形軌則を説くを、後出して記し、此は儀軌と云、即理
て、是はまた家ありて、此傳本の経儀軌多中にかやうのことくける儀
軌を、これ本終極の儀形なるべし、物忌の形訓をもて、斎戒の
儀の字を、これいふことよあり、ものよ、ものけ、なげ、よ、なる
の、も、れ、あ、て、ある、も、ち、鬼、の、る、こ、の、地、集、ま、り、の、と、云、語、も、鬼、の、字
を、かり、あ、ち、お、し、こと、多、あり、い、ふ、い、み、つ、い、む、こ

おのひとの、葉上の、所、入、ひ、つ、りの、お、い、ま、う、も、さ、み、ある、所、さ、の、お、い
い、を、も、て、は、い、ひ、ま、や、し
ま、ま、の、中、終、此、の中、終、の、り、を、入、て、ま、ま、つ、は、を、い、は、せ、れ、ぬ、よ

かみへきり 見えぬかきくまののみにて自得しこと云へ
大枝詞に 抜給清給といひ出せ国造 神賀三恐美恐
美申賜久とみつものこゝにいり人をぬめて云もとく自得
ちまやせるまゝなり

たぬるどらまひ 或云き止を惣て女の上を詳しきよりハ種
種のを詳しき

尖苗 勢冲云二字何より出せるも志より日本紀なとよみこえ
かゝると 斤角斤木

おのども 俗云とばは 矢人めく俗はおのやうあると云ふ
あゝしく 或はどのかるといふ

まことかくもてゆまその女成我つまことしひたるよと
そ後を解してつるなり

そひくたさむ 勢冲云字は西義は理ありと云ふ入の
こさくあつてや

こよあまといふのいふと云ひ 後古決よりあひいひあひいひ
十カ

集はるるぞおにいよみくをさめ女へ

なほ人ハ ちみくの人と云ことあり 直人とはま回
ろむらぬ 三佐以上のゆをさめい ちみくの約むらゝ 忍集のことにて

部類あるものを云 ちみく

たつ池 勢冲云第第一は鶴寸と彼字と云ふ第十二は多
頭寸といけり ちみくをさめつと池の池

十八日言 言言とあるらんえく十八編と云ふ云ふ
かつらぬ 史記伍子胥傳を執りてかつらふとあり

ちんとあるは 脳ことなるも 貴人言位なるのこころのひ家の内
たつたぬことあるもの故物とにやまことあることある

人言位をさむことあり

いふき 自著こころは 大徳のたづねもきぬ
こまぬことありとて 伊勢物語はまがすくことありはむら
かりし村のこゝにありとて 伊勢物語はまがすくことあり

これらへはきづかぬ

ひさうちの 毎夜相見下十七丁のおもてを参考へし但後注
を参考し或曰俗は多負おをとりつは同一俗語なるか
そのこととよくある後注はおほし

按したすまひの下をともうくるこゝの詞とそきてんら
つよえ

よまあり記このめあもみよまともあるありとあてとを
女のあまのこゝと男のこゝ

あみもつこを好撰は古へのあつ中の後あつるこゝに
こゝあまのこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ
こゝあまのこゝのあつるこゝのあつるこゝのあつるこゝ

たゞまぬにいとふるり又常葉舟の中は是は比しての。
物言のみー 伊勢物語は或女のいゝいゝあるべしひや
むとよみーと有常の妻は尼は成たるなると言てなほ
るを多くてかゝる成へー
かゝるふらぬ男をおきてとらふり流るるぬ舟のうらまゝ
ためけよあやぬーと云傳しぬると云まて女の早こり
ふるこち 伊勢云古御等しふる老るると云こたちと云
文辭は女をあめて御と云はりては俗謂貴女為御蓋
取貴人女御之義也と有り流りやうくまらるるぬ舟は
女の通稱と成て貴人なるぬ舟をも何御等やといへり
こゝははる女房の中におとあゝと云とあるこちといへり
あつて此舟を大和物語に仲平の船はふるさかりおと云よりと
こゝを尋みみへきこゝはけりて云まての民はこゝの一
あゝはたたり
うちひそめぬ 弟葉舟回舟舟百年は老古出てよむと云

よむむらうほる大和いともな記時たう入を流ると云
まつくもよむにひぬーとあるとあるまを流ると云
よこれをつたよと云ふりよと云もよとたると云
津の流れ出るを云えしひ抄むの眉をひきむると云
に回し泣けのついで
あゝも人もうらぬと云ふと云のぬや、 伊勢云世七字是か
よまきい流るるあると云はるあるあると云たつぬと
くむもやうてあひそひてと云むむむむむむむむむ
をもんもくーと云む申すもちまらぬうくあをれあゝと
あゝと云りの流るぬなほあゝぬやうてそのと云下を
とあると云とのあゝと云むや
かゝるゆーかゝるゆーと云はるゆーと云はるゆーと云はるゆー
まぬをこゝにあらぬと云るゆーと云はるゆーと云はるゆー
へきをぬやまぬと云るゆーと云はるゆーと云はるゆー
事記のあゝと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

しるこゝは乃が、さういひのまゝはまゝくひらりされと
弟よ、かたじけなく

おまてふせ 信撰書申うつね、あせせともおいまらぬわての
まゝは花のあもて母あせいづこ

けが 神代紀は神さかと云に神姓の字をと云又仁徳紀はよき所
かに吉祥の字をとりり性いふまればたるとせといひ祥いさぬ
しをいへりされとそのおのり一語のあはまのさかよはさかかと
とあまも回しことさかたなりと云るるさくらせとるき記さ
しをいへりされもさかたなりと云、不祥又いふの字をとりり

人なみくよまなり 勢冲、弟系系十八大伴志持教諭史
生尾張少昨、ちこのを嘆は感さよはさきよ、さき花のあま
あんとまたけむけむ時のさかりそのあとりてさくこくに
いへり

あひなつこの、あへるさうてさうれさおもひたのこあへるさ、速
さうてこゝろよりあひひてもさへさきさき人あまをさひひ

志しあひさるるとのあひ、なのおれ、さげさきとらあまに
しるこゝあうし、すげさきよ、よぶあまをさきとらけるに、喜愛

頼 和名抄曰指比、俗云於与比也、ゆれい五指をよ云、季指が古
於与比

あく、ゆれゆり、あく、ゆれ、うかま、こあ、ゆれ、約、うとる、ら、の、ま、う、ゆ
と云、ゆの、ゆ、散、る、ゆ、こ、大、肉、の、首、友、の、あ、つ、る、あ、な、その、ゆ、と
えて、る、友、ち、り、く、は、ゆ、を、ま、う、と、云、と、も、さ、ふ、て、可、指、比、
さ、り、比、へ、ゆ、ち、を、云

い、こ、う、馬、ゆ、み、恐、る、より、い、て、こ、ろ、ゆ、と、ゆ、ゆ、の、甚、こ、と、嚴、こ、と
に、い、り

うち、こゝろ、の、ゆ、ね、 志、海、と、い、ひ、ゆ、せ、り、より、大、裡、に、かり、ぬ、せ、ん、と
も、ゆ、ね、と、い、へ、り、か、な、る、ゆ、た、た、文、章、に、い、つ、ゆ、の、ゆ

ま、こ、う、し、み、正、身、の、字、者、あ、る、ゆ、し、志、せ、う、と、さ、う、と、あ、る、ゆ、り、に、い
ぬ、ゆ、ゆ、の、ゆ、こ、の、人、の、正、神、と、い、ふ、こ、と、ゆ、ゆ、の、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

しのこととをうりてあはれ月のあるまゝは對々一何とま
しのこととにひあやし

かけもよう 武烈紀影姫のあまもひは水さへ盛といひ
ま六水音のなほお水ももひとて一 龍宮井の怪吟
日記によると大和の明日香は阿利葉沖云

律の調 龍宮井の付家之時初をあれとてあつて秋の志
へに琴をなすてひらり時つらひたれと今や月の影のお
もつけ阿水に似つすまあるすといひて又ちよ草を盤
誦まきつるその調はあつらぬ

按 後世にさくはるは後人言ひかきしことちりしるぬ
るしちかまあるし

古事記は信濃赤坂阿良禮能とまきしちりあつたの阿水
はつぬいふといつらるる女のあるといひり
按 ちあつたといふまきしちりあつたの阿水はつぬいふといひり

ていつらぬといふまきしちりあつたの阿水はつぬいふといひり

かきつるまめん 河姫姫勢沖云出所未知
まれ物 愚なる人を云方多し浦をぬき子を詠ふは世間之愚

心之とあり本物文粹子白物左傳注無患世所謂白癡とあ
るに似たり今傳はたあまをぬきものをまきつるとせりよる又
似たり

はつらあき 舟を物持まきつたつもはつらあき
よそとありはつらあき物にまきつる

いさや 按 如何哉あるまし古今に人のいさやもあつた
といふ花をむしりけりいひらるるいさやとかりまをたす
えらつたり或いさや否にやよにかあま疑まあつた人の物
同まきつるまきつる同の意にまきつるまきつる

いさや万葉にいさやとて不知とかりまをたす
鬚下之詞或いさやだつたものぬきしは講はまきつる人の物あつて
うまのうまの詞とまきつる

いさやのまき 古しよあるいさやまきつるまきつるの地

ほろ笑ふ大なるやこびぢあてよめらあへし
申の者よあへる言事也 古りふちりくすいくる馬を秋

の巻れも思ひあを増れり
とちあつ 梅子席を回物には花をちとて秋の末冬にけ

ても阿波の友をこころにさるるあてとこなといひはる
その花らうたげよてうつくしまるれ梅子と云

まつとち 弟系第十三夜浪の思纏若草就西云
いれあへえらほまうげちたるありらるは御解るこころあはる

廿四うてはつたのまうげなまこり成けさしうたさる
らへえらまのほあまのあまこり成むよえこもい

くはゆり
とねらのうらぬ物もまの園云是より下場さうの初やと云返ん

先言ひのしぬより始て申物の初もあり志うれよ上り同言
をちてさこまうて皆回一様にあまをさるれ二人の語を

つよあつと物と御皆笑ひへると云にあつて源氏とまう

ららば忠定に女のさこりもと能はる御さつと云

あつと云といふとこあてかまあはせり
らねらのさうやく ぼ於邊御講さるひてはるる人乃

今言事さうやぬらんと思ひて人のあまはまうらり御け
るにあつりの信らあめ七月七日はせしけら白大お

まの信奥思らあす夜のをさるるさつと云いへやさつら
ひるさつと云

いへいとさつと云のていつと云てはへて人はさつと
るまいつと云さつと云の語あてさつと云はさつと云

あつと云あつと云唯の言さるあへさつと云
あめ 家を祭とさつと云さつと云さつと云そのいさつと云

物言と云ちさつと云あつと云いさつと云
いとさつと云 俗はさつと云といふ

上臈 上臈中臈下臈年終よりあつと云あつと云佐のさつ
と云あつと云

いとさつと云 俗はさつと云といふ

日本紀新編なるものありおもふをいふとよめはる
らしき知し古傳におもといふるをたつる母のおもひ
ゆゑなるよしおもひをいふるをいふるの尾はるもの
底なるもの出らるるおもひの子にけられんをいふる
けりけり

^{廿六}わらわめて 勢沖を今指す海あたらしき和名云類 和名豆良一云保
面を目下之影をかたむねほくゆむくら月つらき
きと云へるはらじ物の草子あまのねくをいふるを
うたはつやあまのねくをいふるをいふるをいふるを
しとつらきを甫に及めて後名はうとこれにちてりお
あるとよめは海の後名を用う今にほくをいふるもの
つらき

^{廿七}あてたる 勢沖を河海にゆられたるは河はしんをいふる
細流は出らるる日本紀の中にあてたるはしんをいふる
ことなり

^{廿七}伊予介をいふるは伊予のこし

伊予介をいふるは伊予のこしをいふるは伊予のこし
後中院のち方いま捕の大納言のめにしていまをいふる
をいふる伊予のこしをいふるは伊予のこしをいふる
あるさぬうつらきをいふるは伊予のこしをいふる

^{廿八}女見をいふるは女見のこしをいふるは女見のこし
ひは備遠南遠なる人あてしすらとていふる
まはるるをいふるは伊予のこしをいふる

^{廿九}あまのこしをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし
えまのこしをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし
うらむをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし

^{三十}あまのこしをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし
あまのこしをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし
あまのこしをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし

^{三十一}あまのこしをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし
あまのこしをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし
あまのこしをいふるはあまのこしをいふるはあまのこし

世に三行やよのあめ
あはれよ 梅をいゆきよめしむを 教候なるし
勢冲云日世紀にこいひ梅香のまを申されぬご
なるとき

むつりて 俗よきしれと云のや
勢冲云馬を十七は古馬とあつましめられ
いふういひとあつりるる梅しちあれん夫よりあ
こころを業のこときあしきこころをいふと梅し
いぬ未梅をのまよみちのまうのあつこころ
と梅をいけりうらうらと梅しとあつちなるなを
らんとあつしひよの度をも梅のうすいし
いひしれを梅しちあつちなるるる梅し
人あつる梅をいひのまこころをいひ 勢冲云今梅
梅をいひなるる梅しちあつちなるる梅し

人もあつる梅しちあつちなるる梅し
けはあつちなるる梅し

三行 今俗よ

いしれ 今俗よ梅をいひのまこころのめし
梅をいひなるる梅しちあつちなるる梅し
くつにいてあつちなるる梅のまをいひ
せもたりなるる梅をいひ

いしれ 勢冲云梅をいひのまこころのめし
梅をいひなるる梅しちあつちなるる梅し
露其胸乳柳裳於帶膈下而笑唬向立言をいひ

いしれ 勢冲云梅をいひのまこころのめし
梅をいひなるる梅しちあつちなるる梅し
ちうそく 勢冲云梅をいひのまこころのめし

風吹とせし 勢冲云梅をいひのまこころのめし
梅をいひなるる梅しちあつちなるる梅し
をいひなるる梅しちあつちなるる梅し

せといふはひらけしる屋風とたむじへきことなりとある
しつみしる屋風とつみとをるるも又さなりとあり
ぬと火ありとありは屋風ひらけてといふことなきを
せり

七ラ
いと

静貞梅いとをゆきといふ人の非にむきとてゆ
といひよさかざるをあといふこのいとをせと入る

十ラ
ぬ

きんつしといふんといふ
勢冲を日本紀第二十九垂髪千皆

十一ラ
これ

よきといふぬとこれたると云ん
うせいのまにわく家 勢冲云は寄人全篇は勢冲子あ
りといふ古本にありは勢冲子ありとあり

はせみをおもつる勢冲のうさうさうさうさうさうさうさ
あよりん此勢冲の古人勢冲しける

夕歌

梅いれとてむとこれいふ人のいふこれいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
ついでて 附居る

徒倚

勢冲を日本紀よりちり

かたはこれうつ勢冲のいふあるを云ふいふいふいふ
をめとせとあるをむとせとあるを云ふ

かたは 勢冲云梅子魚のいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

通後ハ朝美とて死すを云を女の死やうこと中された
ることあり大和物語にも出ぬやふことあり

車と云ふは 勢冲云みまことありと云ふと字のおもたる
かかれが かも家の字多ありは云ふことあり

おひまらけ 勢冲云 勢あやまらけはあひまあとをおひ
たつぬるまことありたはぬまことあり

あほあやま 女名のみこ
かくのあへことあり 勢冲云 勢あやまの女名のみこ

うさるうんとことあり 勢冲云 勢あやまの女名のみこ
せいにありあはれことありと云ふことあり

勢冲云 勢あやまの女名のみこ
も袖そめれり

ありと云ふ 勢冲云 東伝 勢あやまの女名のみこ
田家とありと云ふことあり

うそと云ふ 勢冲云 勢あやまの女名のみこ
と云ふと云ふことあり

と云ふと云ふことあり
ふらと云ふことあり

勢冲云 勢あやまの女名のみこ
と云ふと云ふことあり

勢冲云 勢あやまの女名のみこ
と云ふと云ふことあり

勢冲云 勢あやまの女名のみこ
と云ふと云ふことあり

勢冲云 勢あやまの女名のみこ
と云ふと云ふことあり

勢冲云 勢あやまの女名のみこ
と云ふと云ふことあり

勢冲云 勢あやまの女名のみこ
と云ふと云ふことあり

おきる川

今更

日向とましくむるしくむるるんこさきうより形もす

川のありあてうり 日本紀敏達天皇紀云於是綾糟等懼然

恐懼乃下初瀬中流向三諸岳激水而盟曰

かろわ 斤輪斤羽の面説あり 牧田大人いりてんやよむむと

の御ひき

あしをそくに 万葉集愛字と云と訓

あまのつゝやうは姉をお母てんそくそくつちをあらめとも

あめれり 勢冲云意登集に君をおりお勢ありとては

ことまゝあのこと 林のこととてとて

あいる 或曰三之愛に按あやなると云同祈りやいの言

阿えり 勢冲云和名第九淡路国津名郡平安の意この

平安乃字まらんつとて

あり

人々の 勢冲云其本まむつうとあり傳言のひり

ことせむに新古今言傳まこし人の疑をあり一ツよ

もまそむる志伎略う由乃うとてを引きたておの

しうえかりいけはらにてかりあつてすスるへま

ちとけて 勢冲云信注の心をふらちとけて乃て字

編妙知無等編等皆同おは王家無心等編而後物よんえり
諺あるあたるともええきし馬鞍をのりすと伝ふその義
阿ふ又むの字はをねとむとすと下へ付てむへも理に百淋
王祿廣の末と百淋王其ことひりをも男して王といひぬれ王
家と云へおねそれとる後よりんともさへきハ傳言出まつり
へんがと云傳と何りいさぢれをわて王家の齋と云らま我
延喜式は中納言真世王の末と王氏といへり又桓氏天皇は御
齋とも云へりいしれの祝まも阿れ氏を紹けてみりゆとをけ
皆王氏と云は或は氏をわおと云へり

四十六
二りすまのまゝ後傳に新葉才十又あ岐はる二うこと
よめらもあをこしりて

四十九日 勢冲云於志日輝おり早九と書る隱影はあ
勢も阿れも書物さへきりてこま日七八日なとも書と
用てやり伝傳りりむ日五人なとも同

四十二
勢乃相ももえりて 勢冲云海嶺意四つうくありはる
男乃海よいまえとてさうさうくちとうへく老をわけて
平のあさむむすぬい海とて指さのらうつせそのか
とえむとあもえりりて返一原巨城さうるを身を
うつせれり衣之をわつてあんななりりり

末指花

三十三
わりむととり 勢冲云と指論編の字と空と傳ふるるる在雄等

編妙知無等編等皆同おは王家無心等編而後物よんえり
諺あるあたるともええきし馬鞍をのりすと伝ふその義
阿ふ又むの字はをねとむとすと下へ付てむへも理に百淋
王祿廣の末と百淋王其ことひりをも男して王といひぬれ王
家と云へおねそれとる後よりんともさへきハ傳言出まつり
へんがと云傳と何りいさぢれをわて王家の齋と云らま我
延喜式は中納言真世王の末と王氏といへり又桓氏天皇は御
齋とも云へりいしれの祝まも阿れ氏を紹けてみりゆとをけ
皆王氏と云は或は氏をわおと云へり

三十四
勢冲云於志日輝おり早九と書る隱影はあ
勢も阿れも書物さへきりてこま日七八日なとも書と
用てやり伝傳りりむ日五人なとも同
男乃海よいまえとてさうさうくちとうへく老をわけて
平のあさむむすぬい海とて指さのらうつせそのか
とえむとあもえりりて返一原巨城さうるを身を
うつせれり衣之をわつてあんななりりり
末指花
わりむととり 勢冲云と指論編の字と空と傳ふるるる在雄等

いよ一くゆ 河田いよ一くゆ 女房なれは詩乃支れ伊弉歌ま

酒やいり

つうけあり 葵沖云ちがりしき物とてさうけありと
云俗もあつと云ことと云徳ある身をかへりてあはれは物を物
つらまらつりや云云

ちうまらり 河田下は詩のせえこぬ人をさうはつ

久方の月をあらぬといふぬ **東の歌**

二ま笛 葵沖云和名云蓋 以約反今案所謂高麗用此字矣和者古萬布
江除吹處而六孔之笛也

は笛のさか他かきと吹まへき物とあつぬの昔の笛を
言籍より作てまねと云

つうとひらりと 葵沖云あまらきも受りてさうとほれぬ歌
の田とよ免ふとくは中勢ひを成りてさうとさうとさうと
するさるひも厚とさうとさうとひらぬあつはさうとひら
さうとさうとさうと云上は下へかくへ又さうとひらひら
とさうと倒せり

あましくさ 仔撰 河田いよ一くゆの里田さひらぬ

てたをせさくといふ人をぬき

あつたあつて 河田いよ一くゆの

いそつひらき 葵沖云あつの中を言て用りてさうと小
傳堤返りあつ海のさうと日本紀又棲違をさうと進退をさ
さうとさうとさうと云とさうとさうとさうとさうとさうとさ
あつぬり

十なり 和名云強飯 古波
伊比

それぬあつぬのさ 仔撰 河田いよ一くゆの

らひらきさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさ

えさうのやうあつ云 葵沖云えの字の下へてえはけぬ

むさうのさ 葵沖云灰あつぬとさうとさうとさうとさうとさ

あつぬとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさ
えさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさ

申さざりぬと云ふ 勢冲云よふ云とてさだかしく
おのれをいふに 乃下ゆぬの事 六帖の事

ぬまをいふに 万葉第十一子 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
うもいふに 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

せらしてなる人の 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
なまぬをいふに 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

うつらぬこと 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
るをいふに 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

せらして 勢冲云河内乃下ゆぬの事 山川よりいふ
あんとていふに 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

とて今腐とていふに 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
こつらんとていふに 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

推るに 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
ひそく 勢冲云秘色の五雜俎云陶器 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

ちと盛るに 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
いそく 勢冲云秘色の五雜俎云陶器 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

紀は陵屋と 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
勢冲云和名云 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

勢冲云和名云 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
勢冲云和名云 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

勢冲云和名云 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
勢冲云和名云 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

勢冲云和名云 乃下ゆぬの事 山川よりいふ
勢冲云和名云 乃下ゆぬの事 山川よりいふ

注ハ紅の色也
契沖云ハ引方何ヨ
聖ノミヨク引下ノ白
ハ古今ノ雜体ヨリ
有ルベシ先ノ心
ノミヨク引下ノ白

あつこえするは 厚紀心
うろたふさく 君の着とけけり
袖まさわさるる 注流重くしり 萬葉十はあま 又海
ふけとてしりへり

いろこもをるとまき 河白聴色今極色也 紅色之近赤式ヨリ
然らぬゆゑ 色同物也 紅にあらしてある一色とひひり 又訓守
る時今極色と云ふ 元あるはましくと 持後一色と云ふ
そてそくゆるし 紫東色葉云聴色 袍衣 花名毎情曰聴
多不為 紅之云 桃花葉葉白 飛色 衣 紅ノ邊中色と云
ナリ云 道邊院 紫東色 袍 一色 袍 名ナリ院ニ
モメスナリ 最上ノ物ナシ 非其人用スルナリ 仍テ深紅ヲ禁
色ト云 其淺キ色ハ制ノ限ニ非ス 故聴色ト云云

契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり
さしや 契沖云 宇治於まに 只くはともくも あり

うきまのいそし 海神を二まうりいそしあをきくつられ
た中於更衣をあるる志願すつれとあめあつたことと
と君うといまし少大臣集つたあをいそしことと
ねてこの字をつまぬことと
こととあきこえてこまきうれること 河内水原抄云はる
石好まきとかくひまをこいまはほくちくもあつた
まつるとこの字を形まめりきりきり定めてことと
あつらひといこころ
つれとまき つけれそとのあは海神のうきま
又風まこそつてとあり
あまめぬ 勢沖云昔此記あまを在る所
めいろうの所世口代 河内志多所あま仁公のおもつけあり
といつる不審或説曰淳和仁明文徳清和之御事也然
者可為忠仁公良房公
きやうさく 勢沖云とあまを名の所の形迹を用ひしと均

夏下を法むへきり侍久きあのみ表迹を勢第といふこの
字ぬし
そちうある 勢沖云軒字をそちうとよめること何ま
とまあつれおほつる 昔なるまきくあつたこと
あまをいそし 勢沖云不祥を日本記にあらる
よありあつたこととよめる所 形あつたこと
いそしおまをそちうと云つる神代よりあつた事記に
八千戈神所歌云奴波多麻能久路岐美邪斯志麻
都史佐尔登理与曾比游伎都登理牟那美流登伎
波多々藝云母許礼婆布佐波受まき 游伎都登理
牟那美流登伎波多々藝母許由布佐波受此神哥の
内二志の布佐波受もいそしと同意まき又勢第十
八は大神の池主の家持より汁袋のおうまきと均てまき
あつたこととあつたこととあつたこととあつたこと
まきあつたこととあつたこととあつたこととあつたこと

よめがた

あつらふ... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の...

うらね... 葵沖云俗... といふ

自言... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の...

自言... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の...

自言... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の...

自言... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の... 葵沖云今柳... 氏の子... 此の...

志強しと評めり

和名行旅具云標カ番反漢語抄云今按俗所謂破子

是也破子読和理古標子有障之署也

源語秘訣曰李部王記天曆二年十二月廿日徵

子女王入内仍重取案内供餅云云右餅盛四杯例也三カハ

四盃ト云姜也云云都記經信云寛治三年正月十九日嫁娶

知足院殿盛餅三杯云云右盛餅三杯例也河海抄所載

待賢院御内記云三杯也三カ一ヲ三杯一具ト云ルナリ

今按此昔ハ銀器四杯ニ盛タルヲ中項ヨリ四ノ數ヲ憚リテ三

杯ニ盛タルヘシサレバ此物語ハ一ニメ四杯ヲ盛ニ時分ノ一ナルハ

四杯ノ説ヲ用ユヘキナリ三カ一トハ四ノ數ヲ忌テ三カ一ハ源氏

君ノ取アヘス宣フ也河海中古ヨリノ義ヲシテ注セリソハ

時節相違スヘキ故也

源語秘訣曰いまはさるもといま

とよむへし不諱ると云死と云ふといま

あやう視念の敷のゆゑあるさすか又あらをいしす

して解四杯と云三カ一と云ハ四の数をいむ人テハさるも

も死の字に雖走ら毎まいひきりあはれる毎もらひて

時節相違スヘキ故也

源語秘訣曰いまはさるもといま

とよむへし不諱ると云死と云ふといま

あやう視念の敷のゆゑあるさすか又あらをいしす

して解四杯と云三カ一と云ハ四の数をいむ人テハさるも

も死の字に雖走ら毎まいひきりあはれる毎もらひて

